

浄土

Monthly JODO

5

法然上人鑑仰会

2017 May

貧乏董

連載12

染付山水文膾皿

三宅政吉

グラフィック・デザイナー

私が骨董市に通うようになったのは、三十数年前散歩がてらに寄った東京・中野の新井薬師の骨董市で、染付の磁器を見たことがきっかけである。

それまでは骨董の器などには興味がなかったが、美しい伊万里の染付の器に出会い、その魅力にとりつかれた。今と変わらぬ貧乏人であったから、値の高いものには手が出ない。それでも数点の小鉢や皿を購入した。たびたび出かけては、懐具合によって、数点、あるいは一点と買い集めた。それは蒐集ではなく、日常使いの食器としてであった。それらの染付磁器は今も手元にひとつも残っていない。

写真の五枚の膾皿は四年ほど前に骨董市で見つけたものだ。五枚セットで三千元ほどだったろうか。もちろん骨董屋の値付け通りに買ったわけではない。骨董市では値切るのが当たり前である。たぶん一枚

七、八百円くらいではなかったろうか。それを値切って五枚で三千元にしてもらった記憶がある。業者の親父は「江戸末期、幕末あたりのもの」と言っていたが、もっと下って明治のものかもしれない。そのあたりの詳しい知識はないので断定はできない。

描かれた山水と人物がとても魅力的である。伸びやかなタッチで、松の木や雲、山や波（海か湖、もしくは池か）、そこに浮かぶ舟、そして寺院とおぼしき建造物と橋が描かれている。

三枚目はいったいどういう状況の絵なのだろうか。水に浮かんだ舟というよりは庵に二人の人物が向き合っている。僧侶のようでもある。空には雲と図案化された三つの星が見える。なんとも不思議な絵である。全体に言えることだが、具象を描きながら、大胆な省略とデフォルメで、具象を超えて抽象

に向かう絵画の始まりを思わせる。いや、写実にこだわればおそらく大量生産できないという事情もあったのだろう。省略とデフォルメによって初めて日常使いの磁器の量産が可能になったのかもしれない。

一番下の絵は、上の四枚とは少し画風が違う。もしかすると、ほかの絵師のものが紛れ込んだのかもしれない。



いずれも
口径146ミリ、
高台径90ミリ、
高さ42ミリ。
口縁部は輪花形で
錆釉がほどこされている。

浄土

2017/5月号 目次

連載	私の好きなご法語	福原隆善	2
連載	法然上人と親鸞聖人(十)	林田康順	4
連載	響流十方	小村正孝	10
連載	江戸の川を歩く	森 清鑑	14
連載小説	渡辺海旭 ⁷⁸	前田和男	22
連載	誌上句会	選者＝無縫庵烏鷺坊	28
連載	マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記			32



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
表紙写真＝鬼海弘雄
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

衣食住の三は念仏の助業也。じょごうこれすなはち自身安穩にして念仏往生をとげんがためには何事もみな念仏の助業也。

三途へ返るべき事をする身をだにもすてがたければ、かへり見はぐくむぞかし。まして往生程の大事をはげみて、念仏申さん身をば、いかにもいかにもはぐくみたすくべし。

法然上人のお弟子の禪勝房が伝えたおことばです。この前に「現世のすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。念仏のさまたげになりぬべくば、なになりともよろづをいとひすててこれをとどむべし」とあります。

法然上人は専修念仏せんじゆ一行にすべての仏道をしほられ、迷いからぬけだせない凡夫に、それでも救済しようとされる阿弥陀さまによる救済の道をお示しいただきました。念仏するしか方法のない身にも無理や苦痛があつてはなりません。衣食住の三は人間の生活に必要であり、例えば空腹では念仏に専念できませんから、心身が安穩で念仏するための助けとしておられます。ただ単に自分を甘やかし貪るのであれば、地獄などの迷いの世界に墮ちる行為になるとさとされています。

法然上人は念仏一行にしほるためには厳しい態度で臨めますが、念仏の実践にあたつ

てはたいへん弾力性をもつて導かれます。兼好法師の『徒然草』第三十九段に、法然上人にある人が「念仏の時、眠くなったらどうすればよいですか」と尋ねたところ、「目が覚めればまた称えるとよい」といわれ、また疑い心が起きても「疑いながらも念仏すれば往生できる」といわれたとあります。眠いのを我慢したり、いつとれるか解らない疑い心をとろうとするよりも、念仏こそ大切であると導かれ、兼好法師も尊いことと評しています。いずれも無理をせず、自身安穩に念仏することを勧められています。

念仏に対するおらかなりかたは、例えば念仏三昧発得や百万遍念仏などご法語の随所にみられます。念仏三昧発得は素晴らしいことですが、必ず達成しなくてはならないとはいわれていません。百万遍という念仏を数多く称えることは、『阿弥陀經』のいちにち一七日の念仏に相当し、達成すればそれはそれで尊いことですが、寿命の長短、入信の遅速もあり、一念でも往生できるとされ、念仏のよろこびが積もればやがて百万遍になるのであって、めざまなくてもよいとされます。

このように現世の生活において、自身を安穩にはぐくみ、どこまでも凡夫の立場でただ生まれつきのまま常にお念仏の生活ができるよう導かれています。

大本山百万遍知恩寺

福原隆善

台下

法然上人 と 親鸞聖人

【連載十】

——法然上人が捉えた
お念仏①——

林田 康順

(大正大学教授)

教科書問題が朝日新聞に掲載

去る平成二九年三月一七日、朝日新聞朝刊の「文化・文芸」面に教科書問題が取り上げられ、私のコメントも掲載されました。朝日新聞では平成二七年二月四日の紙面に続く二度目の掲載でした。本連載の冒頭に述べたように、これまで六〇年以上の長きにわたり、中学校や高校で生徒達が学ぶ教科書において、「親鸞聖人は、法然上人の教えを徹底した、発展させた」という一方的な記述が放置されてきました。ただただ法然上人に申し訳ないという思いで発言を繰り返してきましたが、おかげさまで広く社会の注目を集め、その結果、平成二九年三月現在、高校倫理の教科書を発行している六社七冊の内、四社五冊の教科書において、こうした一方的な記述が見直され、自主的に別の表現に改められました。一七日の記事によれば「徹底」と表記している東京書籍と実教出版の2社も修正を

検討している」とあり、近々にすべての倫理教科書から不公正な記述が一掃されることになりそうです。これほど早くすべての教科書の記述が改められるとは予想を超えており、喜びと共に驚きの気持ちでいっぱいです。この場をお借りして、ご支援いただいた方々にあつく御礼申し上げます。

その一方、六〇年間にわたる教育の積み重ねによる影響は計り知れず、後に続く後輩達に大きなハンディキャップを負わせてしまったという忸怩たる思いがあります。だからこそ、あらためて法然上人と親鸞聖人の教えの峻別が必要となるのです。先月から、浄土宗の教えの三本柱となる所求・所帰・去行、すなわち極楽浄土・阿弥陀仏・本願念仏について、その要点をお伝えしています。なぜなら、法然上人の教えの正確な理解が、親鸞聖人の教えとの速やかな峻別を促してくれるからです。

選択本願念仏―去行―

この娑婆世界を〈去〉って極楽浄土に往生するための〈行〉こそ「選択本願念仏」に他なりません。選択本願念仏とは、阿弥陀仏が、あらゆる仏道修行の中から、取捨を施す「選択」をされた結果、自身の極楽浄土に往生するための唯一の行として「本願」に定められた称名「念仏」のことです。本来、本願とは、多くの仏が〈本〉の菩薩時代に発した誓（願）を広く指していましたが、法然上人の教えの広まりによって、本願といえば『無量寿経』に説く阿弥陀仏の四十八願を指すのが一般的となりました。阿弥陀仏は、その前身である法蔵菩薩の時代、第十八願に次のように誓われています。

もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、我が国に生ぜんと欲して、

乃至十念せんに、もし生ぜずんば、正覺しょうがくをとらじ。(浄土宗聖典一・二二七)

(試訳) もし私が成仏を遂げたならば、あらゆる世界の衆生が、嘘偽りなく心の奥底からわが浄土に往生したいと願って念仏を称え、たとえそれがわずか十遍であつたとしても必ず往生を叶えよう。もし往生が叶わなければ、私は決して仏ととならない。)

この第十八念仏往生願こそ、今に連なる浄土教信仰、お念仏の源流と言えます。法然上人は、私達にお念仏を勧める理由を次のように述べられます。

諸行のなかに念仏を用うるは、彼の仏の本願なる故なり。(「一紙小消息」昭法全四九九)

(試訳) 数多い往生のための行の中からお念仏を選ぶ理由は、阿弥陀さまがお誓いになられた本願の行であるからです。)

私達がお念仏を称える理由は、「浄土三部経」の一つ、『無量寿経』に説かれる阿弥陀仏の本願に基づいているからなのです。

念声はこれ一なり

この第十八念仏往生願にある「念」の解釈を巡って法然上人は、善導大師の教えを受け、口に「南無阿弥陀仏」と称える称名念仏であると主張されました。その大きな根拠が『観無量寿経』下品下生げほんげしうに説示される次の一節です。

声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿弥陀仏と称す。仏名を称するが故に、念念の中に於いて、八十億劫おっこくの生死の罪を除く。(浄土宗聖典一・三一二)

(試訳) 声を絶やさずに「南無阿弥陀仏」と十遍の念仏を称えて十念を満たした。阿弥陀仏

の名号を称えた功德によって、その一念ごとに、これから先八十億劫という量り知れないほどの永い時間にわたり生き死にを繰り返すであつた罪の報いを免れることになる。）

法然上人は、この説示に基づいて『選択集』第三章段において「念声はこれ一なり（念と声とは同一のものです）」と結論づけられたのです。私達が修めるお念仏が称名である理由も、「浄土三部経」の一つ、『観無量寿経』の説示に基づいているのです。

救いの構造

さらに法然上人は、『選択集』第三章段において、阿弥陀仏がすべての人々を救おうという思いのもとにお念仏を本願として選定されたので、お念仏は諸行に比してもっとも修し易く、また、阿弥陀仏がお念仏を称えた者に救済の力を直接及ぼすので、お念仏の功德ははるかに諸行に勝れていることを明らかにされました。だからこそ、私達のような煩惱具足の凡夫であつても、お念仏を称えれば最高の浄土（報土）に往生することが約束されるのです。こうした構造を「凡入報土」といい、法然上人が浄土宗を立教開宗された最大の目的であり、その教えの真骨頂とも呼べるものです。凡入報土の教えについて法然上人は、次の『浄土立宗の御詞』を遺されています。

我れ浄土宗を立つる意趣は、凡夫の往生を示さんが為なり。若し天台の教相に依らば、凡夫の往生を許すに似たりと雖も、浄土を判ずること至つて浅薄なり。若し法相の教相に依らば、浄土を判ずること甚だ深なりと雖も、全く凡夫の往生を許さず。諸宗の談ずる所、異なりと雖も、惣じて凡夫の浄土に生ずと云う事を許さず。故に善導の釈義に依りて、浄土宗を興す時、即ち凡夫の報土に生ずと云うこと顕かなり。（昭法全四八一）

（試訳） 今、私が浄土宗を開く目的は、凡夫が浄土へ往生することを示すためです。もし天

台宗の教えに従えば、凡夫の往生を認めるという点で似てはいますが、その浄土に対する評価は至って低次なものです。もし法相宗の教えに従えば、浄土に対する評価はたいへん高次なものではありませんが、凡夫の往生をまったく認めません。さまざまな宗派で論ずるところは一樣ではありませんが、総じて凡夫が浄土に往生することを認めません。それ故、善導大師のご解釈に基づき浄土宗を聞く時、凡夫が阿弥陀仏の妙なる浄土に往生するという真実が、はじめて明らかになるのです。

つまり法然上人は、善導大師の教えに基づいて浄土宗を立教開宗する時、はじめて阿弥陀仏による救いの構造である凡入報土の論理が明らかになると主張されるのです。もちろん、善導大師の教えに法然上人の理解が加わることによって、その論理が不動のものになるのです。私は、法然上人によって確立された救いの構造をそれ以前の仏教各宗派の常識と対比して、「平行線の教え」から「たすきがけの教え」への展開と呼んでいます。

天台宗の常識

言うまでもなく法然上人は、比叡山延暦寺において天台宗の奥義を修得されました。もしも、法然上人が天台宗に留まり、その枠内でお念仏の教えを布教・教化されていたならば、『浄土立宗の御詞』において法然上人が述べられているように「浅薄」な浄土への往生を促す教えに留まっていたことでしょう。

そもそも天台大師智顗は、諸経典に説示される無数の浄土について、それを主宰する仏と関連させ、加えて、該当する浄土に往生する者を四段階に分類する四身四土説を提唱されました。それは、次のようなA・B・C・Dとも呼べるランク分けに他なりません。専門用語が多くなって

しまい恐縮ですが、一瞥してみましよう。

まずAランクの常寂光土は、「法身・解脱・般若」と呼ばれる真理そのものの世界であり、自受用報身（修行に報いて成仏し、無限の寿命を具えた仏）が享受する世界と言えます。次にBランクの実報無障礙土は、他受用報身（他のために慈悲を及ぼす報身仏）が主宰し、十地という高位の菩薩が往生できる世界です。さらにCランクの方便有余土は、勝應身（修行を経て成仏し、有限の寿命を具えた勝れた仏）が主宰し、声聞・縁覚の二乗や十住・十行・十回向という中位の菩薩が往生できる世界です。最後にDランクの凡聖同居土は、劣應身（修行を経て成仏し、有限の寿命を具えた仏）が主宰し、浄土とはいえ、三界といって輪廻の内に位置づけられ、十信という下位の菩薩やそれ以下の者でも往生できる世界です。

これら四種浄土の中、智願によれば、阿弥陀仏とその極楽浄土は、Dランクの劣應身と凡聖同居土に配当されています。まさに『浄土立宗の御詞』通り、「浅薄」な浄土という言葉わななき低い評価を蒙っているのです。いかがでしょう。天台宗による阿弥陀仏や極楽浄土の捉え方のままでは、私達が、自信をもって阿弥陀仏への帰依を促し、ただひたすら極楽浄土への往生を勧めることなど、到底不可能です。だからこそ法然上人は、天台宗の常識に留まるわけにはいかなかったのです。

（続く）

こころのじつぼう
響流十方

法爾道理という事あり。ほのおはそらにのぼり、みずはくだりさまにながる。菓子の中にすき物あり、あまき物あり、これらはみな法爾道理なり。

（法然上人『禪勝房伝説の詞』）

法、そのとおりに

「八万四千の法門」を説くと言われる仏教だけれども、そのなかに「これぞ仏教」といえる、いわば旗印に位置づけられる教えがある。諸行無常・諸法無我・涅槃寂静（三法印）、これに一切皆苦を加えることもある（四法印）。そして縁起、四諦八正道……。諸行無常や縁起などはよく耳にもする。「無常」は日本人の感性に合っているのか、古来、その詠嘆が多くの歌や物語を生んできた。「縁起」は「縁起のよしあし」と日常よく使われてもいる。もともと、どちらも仏教的に正確な使われ方とは必ずしも言えない面はあるが。

これら代表的な教えは言葉としてはそれなりに知られているし、ある程度意味もわかる。しかし、単に「知っている」と、体でうなずかれ、「こうして現に生きているわたくし」の実存レベルにおいてどう捉え、事々日々に照らし合わせ、実践するかということとは必ずしもイコールではない。

自分は体でうなずかれているか、実存レベルで捉えられているのか――。

堂々巡りに行き詰まりを感じ自暴自棄になりかけたとき。言いようのない虚しさに覆われたとき。怒りちぎりたいとき、否、抑えきれずに怒鳴ってしまったとき。ふと、その問いを自分に投げかけると、まったくなっていないことを思い知らされる。余計に増すばかりの落胆。釈尊のせつかくの教説も、アタマ

だけで、表面的に知っているだけだったのだ――。

つくづく、悩み苦しみは尽きないものだ、と思う。よくもまあ、毎日いろんなことが起こると、なかば呆れる。みんなそうなのだ、と思いまするが、「このわたくし」の苦しみが軽減することには役に立たないこともある。それが現実であるし、その中で生きていかざるをえない。それが実存じぞんということだ。釈尊は苦しみが生じるプロセスを分析、その根源は無明むみょうであると説いた。後に十二縁起としてまとめられたその十二の項目の最初に置かれる。これは、根源的な無知、具体的には四諦や八正道や無常・苦・無我といった仏教の世界観――真理を知らないこと、と解説される。たんに知識として持っているかどうかということではなく、それが体でうなずかれない愚かさというのだろう。凡夫なのだ。

釈尊はいう。苦しみから放たれたければ無明を滅せよ、と。きわめて論理的だ。わかりやすい。しかし、きつい。きつとこれは、どうにもならない。凡夫であるということは、おそらくはついにのがれないことをいうのだろう。

法然上人はいう。仏にあずけよ、と。

道元禪師は「自分を忘れよ」と言い、至道無難は「生きながら死人となりて

なりはてて 思いのままにする業ぞよき」と述懐したという。いずれの禅僧の言葉も、仏への自己放擲を言っているように思える。浄土宗でいえば阿弥陀如来への帰依である。仏教は自力聖道門と他力浄土門といわれる二つの範疇に分けられる、とする。たしかに両者はその性格を異にするだろう。しかし今の二人の言葉からするかぎり、最終的には他力に包摂されるのでは、と思えてくる。真理―法(ダルマ)と慈悲の完全無欠な体现者である阿弥陀如来に自己放擲を勧めるということ、それは、真理を遠巻きに見て生きるのではなく、真理の示すまま、真理の中にしか生きようのないことの自覚を促しているのであらうし、それは具体的には苦は苦として、悲は悲として、怒は怒として、真摯に臨めということなのだろう。生を放棄しないとしたら、実はそれしか、すべはない。「爾」は「そのとおり」の意味、つまり「法爾」は「真理のとおり」ということになる。「南無阿弥陀仏」とは、無常・無我なるがゆえに苦であるところのこの世を、諦め(あきらかにし)、諦めずに(投げ出さずに)生きよと、仏から与えられたエールとも映る。その先々に「死生ともにわずらいなし」かうなずかれてくる、ということなのだろうか。

(小村正孝)

江戸の川 を歩く

第十二回

江戸ウォーカ―

森清鑑

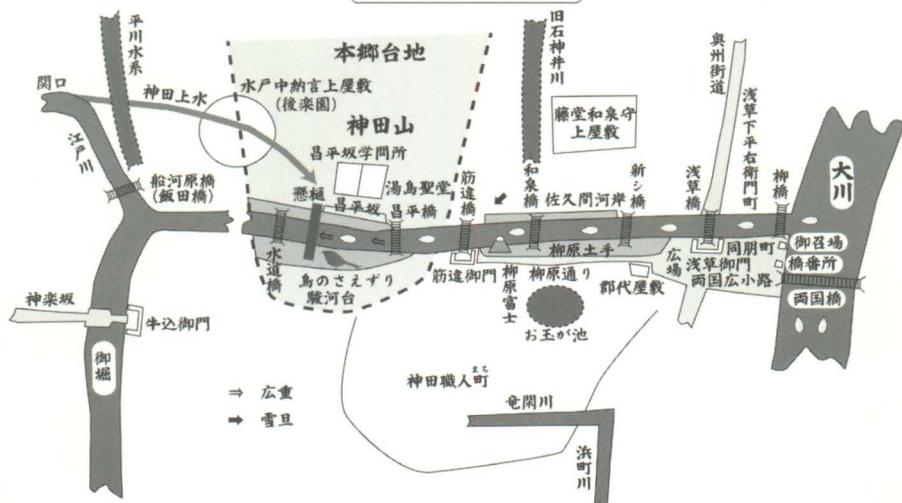
河口

大川に架かる両国橋を潜ると、左岸に橋番所、上之御召場。そして柳橋が見えてくる。この橋は、瀟洒で、どこことなく江戸の風情を感じさせる橋である。ここが神田川の河口。川面には、さまざまな形をした舟が沢山浮かんでいる。右を見ると、浅草下平右衛門町、左は、下柳原同朋町の家並み。料亭があちこちにあり、大川での船遊び、両国橋の花火など江戸遊興の風趣を醸している。

神田川水系

神田川は、江戸の母なる川である。江戸市中を包み、北の外堀でもある。上流は、飯田橋のところで二つに分かれる。一方は南に下り、江戸城を囲む外濠となり、本流は船河原橋を潜って北へ上っている。その先は、江戸川と呼ばれ、関口で神田上水が、分流される。やがて、妙正寺川や善福寺川が合流。終点の井の頭池に至る流路も神田上水と呼ばれている。神田川水系は、江戸の生活水を提供し、下流域は、堀、船運の要であ

神田川水系



◆神田川水系図

り、文字通り、江戸市民の「母なる川」なのである。家康による江戸の都市造り大構想は、神田川の掘削造成によって見えてきたと言っても良い。

家康の都市造成と神田川

時家康が江戸に入府した一五九〇年には、神田川と呼べる形跡は、大川（当時は浅草川）からほんのちよつと内陸に入る短路に過ぎなかった。この頃、後の江戸の中心部は、大部分、湿地帯か海の浅瀬で、太田道灌ゆかりの江戸城も、日比谷入江と呼ばれる海に面し、北から平川の幾筋もの流れが、小石川と合流し、流れ込んでいる状態であった。日比谷入江の東には、舌のように突き出た、江戸前島（東京駅から新橋一带）があり、その島の東側は、無論また海で、石神井川が上野や本郷台地の側を流れ下り、不忍池を突っ切り、神田お玉が池を通り、今の小舟町、堀留辺りで江戸湾に流れ込んでいたのである。

平川、石神井川の付け替え大工事

この二本の水系が、当時の江戸を湿地帯化し、度重

なる洪水をもたらし、江戸湾に土砂を運ぶ。江戸時代でも、隅田川下流に州があったのは、その名残である。家康は、この湿地帯や浅瀬を埋め、そこに大都市を造る構想を抱いた。全国から人々を集め、生活させるには、広大な土地を生み出す必要があったのである。そのためには、この二本の水系を遮断しなければならぬ。そしてこれを水運路や堀となす。幸い、周囲は、小高い山、台地が江戸湾を囲んでいる。これを削り、浅瀬の江戸湾を埋め立て、土地を造成する。削り取った台地も都市化する。家康は二本の水流を遮断し、東の浅草川（大川）に流す、付け替えを着想。夢見る都市の内郭、外郭の堀とし、物資運搬の柱とする壮大な計画である。こうして最初に、日比谷入り江に流れ込む、平川の遮断付け替えが行われる。その結果が日本橋川である。続いて、平川上流部を分流する形で、そしてメインの石神井川を遮断、付け替え工事に着手する。これが神田川の始まりである。こうして慶長十年には、神田台地から大川までの神田川が完成する。

河口からの船旅、柳橋から浅草橋へ

前方に浅草橋が見える。当時、江戸の東を大川に沿って北上する奥州街道は、重要な北へのルート。そこに架かる橋が浅草橋である。橋は、直接、通行の人々の検閲をする、浅草御門に繋がっている。大きな枡形で仕切られた城門のような景観。御門の前は大きな広場。この広場は両国橋の西詰めにある、両国広小路と繋がっている。江戸期、両国広小路には、芝居の幟がはたまり、いろんな店が出て大変な賑わいを見せており、両国橋の西詰めには、橋番所があり、役人が目を光らせている。この神田川河口の北側には、浅草の家並み。南側は、浅草御門、大番所に接して、防壁のような、こんもりした土手、堤が続く。堤には柳が植えられている。これが通称、柳原堤である。舟の右手は、荷揚げのための久右衛門河岸。柳原土手に沿って広い柳原通り。そして関八州郡代官所屋敷の長い棟。すると次は新シ橋である。橋の南側は豊島町。そのさらに南には、浜町川と龍閑川がコの字に繋がる角となる。

新シ橋から和泉橋へ

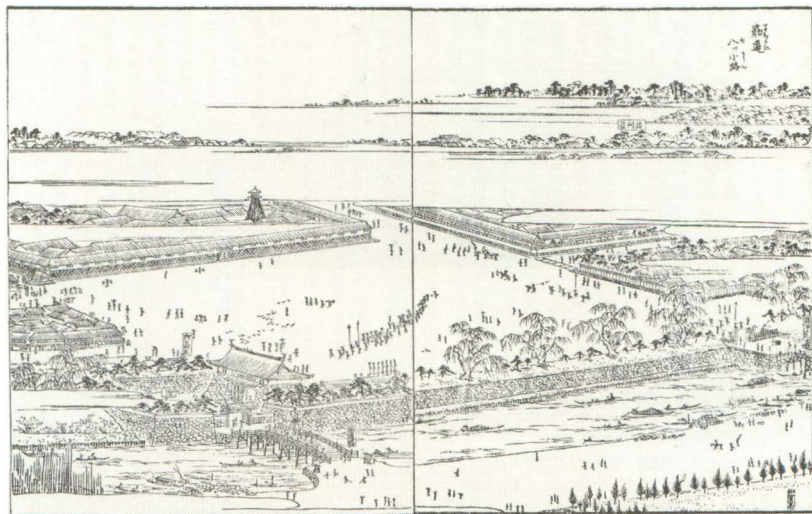
新シ橋は、庶民が自由に浅草方面に行き来できる橋である。この橋の右手から、有名な佐久間河岸が始まる。河岸の後ろには、向柳原町の家並みに続いて小太名の下屋敷。そして藤堂家の上屋敷となる。まもなく、舟は和泉橋に着く。その名は、藤堂和泉守から付けられた。橋を北へ渡ってちよつと行くと、右に藤堂和泉守、三十二万石の上屋敷西堀がある。戦国大名として家康の江戸造りにも貢献した、あの藤堂高虎の末裔。その昔、旧石神井川は、この和泉橋辺りを南下して流れていた。そして嘗ては、この和泉橋の下に「お玉が池」があったのである。石神井川が神田川に付け替えられ、池は江戸時代に埋め立てられたが、地名として残る。幕末の北辰一刀流、千葉周作お玉が池道場（玄武館）に多くの若者が通う。彼らは、お玉が池で修行していると語る。それは、千葉道場のことであった。玄武館からは、多数の異才が育っている。清河八郎、山岡鉄舟、坂本龍馬、山南敬助。

川幅拡張、掘削工事（仙台堀）

江戸当初、神田川、和泉橋から飯田橋の流れ部分は、まず、西の平川からの分流で細い川幅の掘削から始まる。そして後年、この川幅を広げ、舟が通れる掘削大工事に着手する。工事の主役は仙台伊達藩。結果、神田川の川幅は大川から和泉橋までの川幅と同じくになり、完成する。そこで神田川のこの部分は仙台堀と呼ばれていた。工事は元和六年（一六二〇）に完了。結果、本郷台地の南端が分断され、駿河台となる。

和泉橋から筋違い橋へ

舟を進めよう。和泉橋の右手には、佐久間河岸がまだ続いている。左手は柳原土手。佐久間河岸や柳原土手はしばしば時代劇に登場し、江戸っ子にはおなじみの名。佐久間河岸の北側は火除広道となり、神田佐久間町、相生町、旅籠町。庶民の家が密集している。その北は、不忍池まで大名、御家人の屋敷が密集している。左手の柳原土手には人工の柳原富士と柳森稲荷の社が見え、この辺りから土手裏の柳原通りの道幅はぐ

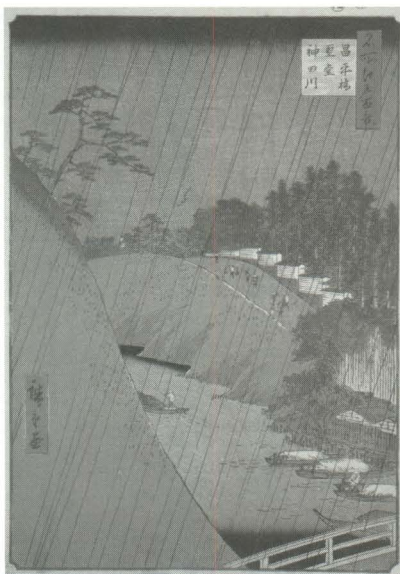


◆江戸名所図会 筋違いハツ小路。下神田川。左筋違い御門。

んと広が、次の筋違御門広場に直結している。筋違御門の神田川に架かる橋が筋違橋（万世橋）。柳原土手に接して高い石垣に囲まれた、堂々たる枡形の筋違御門。筋違い広場からは八本の道が放射状に展開。通称、八つ小路。広場では御門に向かう大名行列や町民が大勢行き交っている。神田川は滔々と流れ、沢山の舟が行き交、柳原土手はここから石垣に変わる。広場の西、南端は小大名の上屋敷堀で仕切られ、東は町人町。区分けされている。

昌平橋

そして武家側の広場の西端に架かる橋が昌平橋である。昌平橋からは景色ががらりと変わって、緑の崖を切り開いたような溪谷美が展開。あまりの美しさに広重は筆を執る。雨の神田川。右下に小さく昌平橋が描かれ、昌平河岸に横付けの荷舟には雨を凌ぐ藁が被されている。材木が立てられ、急な昌平坂を人々は箕を被って登っている。そして湯島聖堂の練り堀が描かれている。左は急な崖。これぞ、神田山を二つに割っている。神田川を通した証である。この辺りの神田川の清流は、



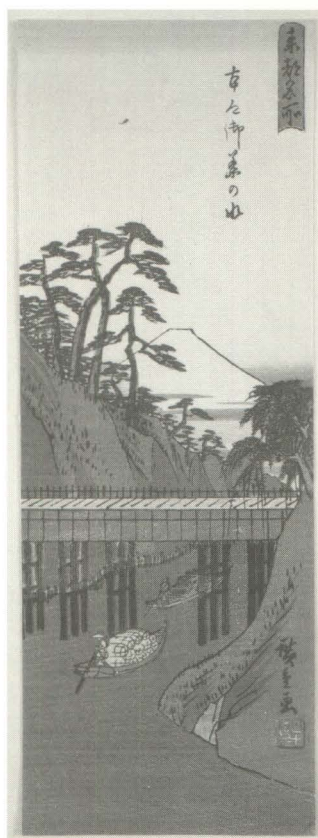
◆広重「昌平橋聖堂神田川」

風光明媚な清遊の地として江戸っ子に人気。茗溪と例える歌人もあった。

そして、神田川の浅草橋から昌平橋にいたる、南側一帯が江戸を代表する神田の職人町で占められている。染め物の紺屋町、鍋造りの鍋町、鍛冶屋の鍛冶町、大工が集まる堅大工町。ここは「神田の生まれだつてねえ」の世界である。

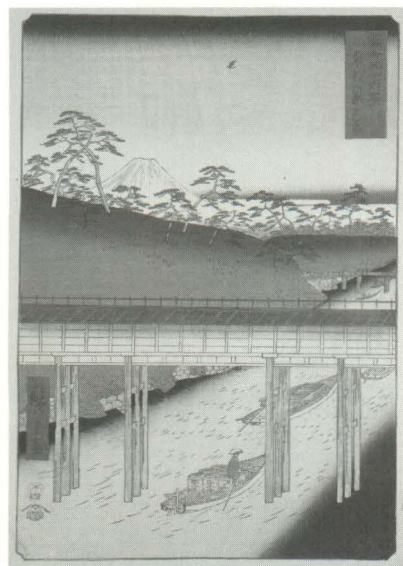
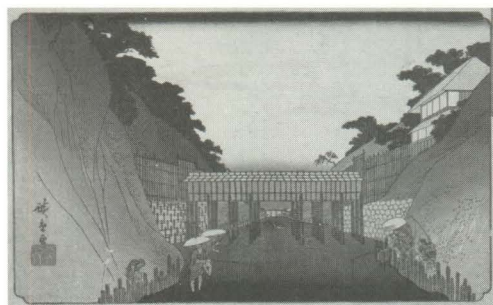
懸樋（水道橋）

舟を進めよう。川の右手を見ると、湯島聖堂に続いて幕府の昌平坂学問所の建物が連なる。大田南畝も、



◆広重「水道懸樋」4態

高杉晋作もここに通ったのである。左側の緑の崖はさらに競り立つ。ここは豊かな自然を育み、鳥の鳴き声^{すいどうきう}がこだまする名所であった。すると、江戸を象徴する水道橋、懸樋^{かけひ}が見えてくる。上流の関口でさらに不純物を濾過した水道水が広大な水戸中納言の上屋敷（後楽園）を通ってこの懸樋を渡り、地下にもぐり江戸市中に配水される。懸樋とは、水を引くために地上に設けた樋^{とい}のこと。広重は神田川に架かる、この懸樋の風景を幾つも描いている。「江戸っ子は、水道の産湯に浸かつて育つ」。江戸ならではの光景である。



小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第七十八回

第二部

ライン

来江の古城遥かなり

在異郷十有余年、愈々帰国⑥



海旭に女性の影なし？

渡辺海旭はドイツ駐箚^{ちやうさつ}日本大使の珍田捨己の私邸を再訪して、ついに帰国の決意を告げた。経緯を説明しようとする海旭と、それを聞きたがる妻を制すると、珍田は言った。

「それ以上は聞かないことにしよう。渡辺君、君にはつらい決断をさせた。そして君のご婦人にも。では、今後のことを相談しよう」

「は、はい」と海旭は返したものの胸中に居残るわだかまりと共につい一月ほど前の痛恨の別離の情景がまざまざと浮んできた。

早速にも海旭の胸中に去来した興味深い物語をご案内しなければならぬところだが、筆者としては、その前に物語の「根拠」を示しておかねば筆を先に進めることができない。そうでないと、筆者が物語の展開に行き詰まり苦し紛れにただただ妄想を逞しくしただけの「大ぼらの偽話」だと読者諸賢に受け取られてしまい、それでは筆者も無念だし、

読者諸賢にも無駄な読書になりかねないからだ。

なるほど海旭自身の日記や書簡には、「海旭に相思相愛の女性がいた」直接的な記述はないが、「さもありなん」と納得していただけるだけの「傍証」はある。それは前回掲げた、「いかにも女性にもてそうな紅顔の美少年然たる海旭留学中の写真」だけではない、それ以外にも、一つならず多数あることを、まずは提示しておきたい。

仮に従来の「海旭に女性の影なし」を弁護人の主張とすると、さしずめ筆者は「海旭に女性あり」と告発する検察官になろうか。以下、弁護側に「証拠」を開陳させる一方で、検察官たる筆者から「反対尋問」を行ない、判事たる読者諸賢の賢明なる判決を仰ぐこととしたい。

「独身主義」は益々堅固に

弁護側はかねてよりドイツ留学前から「海

旭に女性の影なし」と主張している。

ちなみに留学するにあたって、海旭も發起人だった「新仏教同志会」一同から十円という大枚の餞別を渡されて、こう断わっている。「僕は生涯結婚しないから、生活は簡単にく、したがって金はいらぬ。これは立ち上がったばかりでまだよちよち歩きの同志会の運動につかってくれ」

さらに弁護側は「生涯独身の意思」は留学中にいよいよ強まったと主張する。その証拠は、留学先から畏友の東京帝大教授・姉崎正治に宛てられた書簡（帰国の二年前の明治四十一年一月）の以下のくだりである。

「僕が一生故エドモンド・ハーディの如くなるべく、極めて進歩せる思想と忠実真摯の研究的態度を取り、而も忠実な加特力（カトリック）教の一僧として淨戒を守り寂然として書齋に円寂したる彼は僕が最近の模範なり。妻孥なく児孫なく麻衣綿服一生を送了せんと誓いし僕には帰東の後は費を要すべきものあら

ず」（『壺月全集』下巻五七六―五七七頁）

なお、ハーディは海旭留学中の一九〇四年に五十二歳で逝去したインド学の泰斗で、敬虔なカトリック僧として終生独身を貫いた。

弁護側は海旭の帰国後の証言も多々あるとする。たとえば、海旭は住職をつとめる深川西光寺に多くの若者を寄宿させて育てたが、あるとき「先生、なぜ結婚をなさらないのですか」の質問にこう答えている。（小林大蔵編著『壺月和尚の面影』より）

「女房を持てるだけの金があれば学生の世話をする。学生の世話が思うぶんに出て来ないのは貧乏だからだ。結婚式に、一人前、二百両ぐらいのご馳走が出来るようになったら結婚するよ。その金がないから結婚も出来ず、思うように学生の世話も出来ないのだ」

「貧乏」と「学生の世話」を口実にしているが、弟子たちはこれは海旭一流の韜晦とみて、こう納得しあったという。

「海旭先生の新戒律主義は、いわば『古酒新

『囊』で、仏教戒律に新しい時代にふさわしい衣服を着せようというものだ。先生は西光寺を新時代にあつた『新律院』にしようと決意、そのために自ら『一生不犯』の独身生活を覚悟されたのだ」

「独身主義」どころか「女性嫌い」？

さらに弁護側の主張を裏付ける証言として、海旭には「独身主義」どころか「女性嫌い」とさえ思えるエピソードも多い。

海旭が帰国し西光寺の住職に復して十余年たった大正九年（一九二〇）、ヨーロッパ初の比丘ニャーナティロカが二人の弟子を伴つて来日した。その一人はドイツ皇帝の遠縁にあたるエルゼ・ブッフホルツという妙齢の金髪女性で、彼女の目的は海旭に弟子入りすることだった。エルゼ嬢の哀訴に慌てた海旭は、「生涯独身の戒律を自らに課しており、西光寺には女の人は置けない」と断っている。

エルゼ嬢は諦めはしたが、おそらく内心で

は納得できなかったのではないか。「生涯独身」と「女性の弟子はとらない」は同義ではないからだ。これでは、単なる「女性嫌い」と思われても致し方がない。

この「男女寺を同じくせず」は、海旭の身内の女性にまで徹底された。

昭和八年（一九三七）の年明け早々、海旭は重篤なインフルエンザに罹つて床に臥すが、兄を心配して看病にかけつけた妹のかめ子にも、その「禁制」を解こうとしなかった。海旭は、夜の八時の「女人禁制時間」になると、妹が「薬を煎じているところだから」といつでも途中で帰らせた。弟子たちが、「かめ子さんは外のお方ではありません、男手ばかりで介護が至らぬので、こういう時ですから、西光寺にお泊り願つて、介抱していただきたいらどうでしょう」と進言しても、海旭はがんとして聞き入れなかった。

そしてその夜、容態が急変、海旭はついに帰らぬ人となった。

いくら「独身主義」であっても、ここまで徹底して女性を遠ざけるのは、いったいなぜなのか？ ここには海旭の強烈な意思が貫かれていると感じざるを得ない。

たしかに海旭には「女性嫌い」とさえ思わせるエピソードが枚挙にいとまがなく、弁護側もそれを「女性の影すらなし」の重要証拠としているが、検察官たる筆者にいわせれば、それこそが逆に「生涯にわたる相思相愛の女性が存在した」という紛れもない反証になると思えてならないのである。

すなわち、帰国にあたって相思相愛の女性と結んだ「生涯の盟約」があり、それを果たし続けるために過剰なまでの「女性嫌い」を演じたのではないかと。

もし海旭が、生まれつきの「女性嫌い」だったなら、留学中においても帰国後と同じような振る舞いと兆候があつてしかるべきであろう。たとえば女性について否定的な評価を下すとか、そもそも女性を論じることすらな

かったかもしれない。ところが、友人たちとの往復書簡の中には、しばしば女性について硬軟とりまぜた奥深い記述が多々あり、むしろ女性の暮らしぶりに強い関心があるのしか思えてならないのである。そんな中から「軟」と「硬」を一例ずつ紹介してみよう。

書簡から「海旭の女性」をあぶりだす

まずは「軟」だが、「新仏教」の同人にむけた「ドイツ巷間話」で、怪しげな娘から聞き出した何とも怪しげな話をこう伝えている。

『復活祭の月曜に、是非富籤を一枚買つて頂戴な。その籤は、屹度^{きど}当るといゝますからね。私も一枚貴君にあげますよ。然し誰にも秘密よ。』主婦の妹Eが、吾に特に密談せんといふ用事は之に過ぎざりき。『よろしい月曜のカフェーにおいでなさい。私は籤は入りませんが、二万マルクの一箱籤が当つたら、半分は私のものさ』（『壹月全集』下巻四三

八頁)

と記してから、さらに娘から、当のカフェーにいくと、巫女ならぬ「巫男」がいて、わが故国の梓巫女よろしく「口寄せ」で当たり籤のご託宣が下されるのだという。

かたや「硬」も同じく「新仏教」の同人にむけた「ドイツ巷間話」だが、底辺の労働者に音楽会を楽しんでもらおうと奮闘する上流と思われる女性たちを感動をもって記している。

「自由誌主筆P・ドクトルWなどの面々、発起にて、ヲペラよりP君M夫人S嬢の来り助くるあり。平民音楽会成立せり。而して労働者及其家族の為に清新にして趣味ある日曜日を供したり。会場には絹服のする、音もなく、宝石の輝もなく、値高き香水の香もなく、唯五百にあまる素朴強健の労働者及其家族の、肅然而も亦恬然として仙楽妙歌に摂せられつ、平素の奮闘を慰するに似たるを見る。吾之を見しときほど快を覚へたるは少なかり

き」(『壺月全集』下巻四三九頁)

「軟」にしろ「硬」にしろ、いずれも海旭の女性への好奇心は旺盛で、血を分けた妹ですら「女性」というだけで遠ざける同じ人物の態度とはとても思えない。おそらく留学中と帰国後で海旭の女性への接し方が大きく変わったことは明らかであろう。そして、両者を隔したのは、海旭と生涯を約した女性の存在であることは間違いないまい。

海旭の好みの女性は、言うまでもなく前者の「軟」の「主婦の妹E」よりも、後者の「硬」の「M夫人かS嬢」だろうが、さらに書簡をつぶさに観察していくと、相思相愛の女性に相応しい像が鮮明に浮かびあがつてきそうだ。さて、その女性とは…。

残念ながらいところで紙幅が尽きた。続きは次回に譲るとしよう。

(つづく)

浄土誌上句会



〈特選〉

一小節ごとに春めくハーモニカ

相川美智子

●節

惜しまれて亡くなった小沢昭一の歌を思い出
す。むかしの小学校では童謡や唱歌の演奏を教
えた。このハーモニカという楽器はどこかノス
タルジーを誘う。一小節吹くごとに春めくのは
いかにも感じが出ている。

〈佳作〉 銭湯の虎造節や渡り漁夫

薔薇の芽へ第二関節ほどの距離

子等はみな節足動物春野球

稲毛 幸久

斎藤 緑郎

佐藤 雅子

●分

〈特選〉

春近し寺に座布団百人分

齊田 仁

寺における御法事も最近は椅子式が増え
た。しかし大法要ともなれば座布団のほうか
より多く参加できる。そんな一日のためだけ

に座布団を積んであるのかも知れない。寺とはそんな不可思議無量な空間でもある。

〈佳作〉古民家に分け隔てなし飾り雛

佐藤 雅子

梅八分みな表具屋を覗きゆく

村田 篠

分校の五人合流三学期

内藤 隼人

●自由題

〈特選〉

材木の湿りほのかに寒の明け

月島比呂実

この句でいう湿りとはすなわち香りである。雨あがりに香る一本の木材と読んでもいいが、材木屋に新しい材木の立ち並ぶ圧巻を讀み取りたい。東京であれば海側の町。材木の匂いに寒の明けを感じたのである。

〈佳作〉恵方巻き十四五本もありぬべし

換骨 奪胎

立春や空分かつもの何もなし

井口 栞

キャンディが三粒もつすぐ春です

小栗由紀江



湯島自由題

兼題

浄土誌上句会のお知らせ

誌上句会〔編集部選〕

■節

寒明けの第三小節あたまたまのラ
関節のなき手袋に握らるる
長塚節の生まれた村の畦を焼く
節々の痛むふるさと春となる
二ヶ月の関節としてクレイン車
春風邪や節穴じつと見上げをり
■分
分度器の一目盛ほど日脚伸ぶ
分室は今日で解散春埃
下町は川に分たれ春隣
その午後は按分したる冬と春

頼近宇多子

工藤 掉

藤堂祐介

金井浩司

浅見友香里

皆川留美子

和田典行

仁科良平

菅原美樹

峯岸智之

消息の絶えし分隊野火の果て
三人で分ける桜餅五つ

桑原麟三
高崎 健

■自由題

水門で変わる川の名日脚伸ぶ
豆撒きの豆の残っている舗道
小野田兵のらくろ談義懐かしむ
夫逝きて一日長かり涅槃西風
カレーパンがぶりと春の始まりぬ
いまは亡きいろんなひとが内裏雛
白梅のいのちが細い枝のさき
雛の夜のまかない飯に目玉井
熱々のうどんにおかか雛の夜
厚切りのたましひ皿にある日永

馬橋明希美

弓谷由紀江

飯島英徳

佐藤雅子

長谷川 裕

遠井光彦

町田也寸志

鳥居光博

前田弘道

堀田憲正

締切・二〇一七年六月二十五日

発表・『浄土』二〇一七年九月号

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんね

かまち♡ひろう



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。
 福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞

(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞)



編集後記

雨降ってうれし蛙の目借り時

岱潤

先日ある親が学校に怒鳴り込んできた。先生が話を聞くと、「内の子供には今日天気予報で雨が降ると言っていたので傘を持たせた。しかし左の肩がずぶ濡れになって帰ってきたので訳を聞いたら、傘を持ってこなかったお友達を、相合い傘をして送ってきたからだと言う。学校では相合い傘を勧めているのか。その友達が傘を持っていないのは、傘を持たせなかった親が悪いのであって、親が傘を持つてくるまで待つていろと言えないのか」という話だった。

私は驚いてその親の顔をまじまじと見

てしまったが、至ってまじめな顔で仰っていた。そう言えば最近テレビを見てみると、アメリカの大統領や、フランスの大統領候補などが、至ってまじめな顔で、自国の利益だけを力説し、移民や難民など弱者と思われる人々は、虫けらのごとく話しているニュースがよく流れる。そしてそれを支持する人々が大勢画面に映っている。世界の趨勢がそうなのだろう。移民政策では我が国は全く何も言えない。受け入れを事実上拒否しているに等しいからだ。国を作っている人たちがそうなのだから、親がそうなくても仕方がないのかもしれない。

相合い傘をすると確かに片方の肩はぬ

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

れてしまう。でも心が温かくなるのを感じることが出来る。人間としてのやさしさや思いやりの心が育つからだろう。人間にとって大事なものを、それを間違えないでほしい。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十三巻五月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十九年四月二十日

発行 平成二十九年五月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三)五七八七九四七

FAX 〇三(三)五七八七九四七

振替 〇〇一八〇・八・八二二八七

映画監督・ドキュメンタリー作家

森 達也 講演

世界はもっと豊かだし、
人はもっと優しい

森 達也 もり たつや

1956年 広島県生まれ 立教大学卒業

98年オウム真理教の荒木浩を主人公とする映画『A』を公開。2001年、続編『A2』が山形国際ドキュメンタリー映画祭で特別賞・市民賞を受賞。著書に『放送禁止歌』『下山事件』『いのちの食べ方』『王様は裸だと言った少年はどうなったか』など多数。最近は季刊誌『法然思想』に法然上人について連載中。

6月22日(木) 午後2時から3時半
大本山増上寺(慈雲閣1階ホール)

一般 1,000 円 当会会員無料

予約・問合せ先●法然上人鑽仰会

東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階 〒105-0011

E-mail hounen@jodo.ne.jp / ファクス 03-3578-7036

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

浄土宗の日常勤行式が
写経になった!! 写経後は
オリジナルの経本
にもなります。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の皆様へ

写詠歌 セット

宗歌「月かげ」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう!

当会オリジナル新商品!!

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。